

徳島県立近代美術館企画交流室長
森 芳功の



美術の時間
を
楽しむ
ための
ヒント

美術をたのしむ、美術館をたのしむ

その99 ドイツのアートプロジェクト教育と「テーマ展示 戦後徳島の美術」

マリオ・ウアラッスさんの 教育実践

学芸員は休みの日も展覧会の調査に行くなど、自己研修で過ごすことが少なくありません。七月末のことですが、私は大阪市で開かれた美術科教育学会のリーサーフォーラムに参加しました。ドイツのハイデルベルグ大学教授、マリオ・ウアラッスさんの講演と彼を中心とするシンポジウムがあったからです。

ウアラッスさんが進める「アートプロジェクト教育実践」がなかなか興味深いのです。二〇〇八年に來日したときもお話をうかがったのですが、今回は、工事現場と関わらせた「アートプロジェクト・工事現場」について報告がありました。小学校一年生の授業です。

図工室の隣でカフェの建設工事がはじまる機会を捉え、数ヶ月間に渡って工事の進捗と歩調を合わせた授業が展開されていきます。はじめは窓から隣の敷地を見て、どのような建物ができているのか想像しそれを画用紙に描くところからスタートします。各自、自由な空想ができたところで、ヘルメット姿の現場監督さんが登場して、本物の設計図をみんなで囲みながらお話を

してもらいます。

シャベルカーで、土を掘り返しはじめた頃には、床に粘着テープで線を引き、積み木を並べ、おもちゃのトラックやコンクリートミキサーなどを持つてきて遊びます。クレーンのおもちゃと関連させ、現代作家（レオナルド・エルリッヒ）による家を持ち上げるクレーンの写真について意見交換する時間もあります。工事現場の土をもらい、分類観察してから地面をイメージした絵も描きます。そこでも土を使った作品（アントニ・タピエス）の鑑賞が行われました。

細かく紹介すると切りがありませんが、工事現場のコーンを連ねて造形表現をしたり、教室の壁の一部を取り払われシートに覆われた仮設壁になったときは、そこに「壁画」を描いたりするなど、授業の流れはフレキシブルです。

リーサーフォーラムの時点で実践は途中段階だったのですが、机を積み上げ、バケツなど教室の備品も使って大きなインスタレーション作品が生まれ、子どもたちによる発表会も行われました。子どもたちは、進みつつある工事現場という現実と関わりながら想像し、身近にある素材を活かして、

自身の表現を形づくっていたのです。

「日本の小学校の授業でも造形遊びと違って、絵や彫刻とは違った空間造形に取り組むことがあります。似ている面もあります。しかし、工事のような現実の出来事と並行させてイメージをふくらませ、関連する美術以外の専門家が関わり、鑑賞にも積極的だったりするケースは少ないのかもしれない。

ウアラッスさんはこの実践を、「自分で決定し人生のさまざまなことに対応する学習」と捉えています。子どもは、工事をめぐる数多くの要素やその関係に触れながら、自身の問題意識を形にしていくなかで、その過程は多様な可能性をもつものから何かを選び取り、何かを捨てる作業ということができます。定められた答えはなく、自分で考え、最後に自身が実現したものは自分だけのものとなる。その過程にこそ「生きる力」を身につける大事な要素があるという考え方を

ウアラッスさんは、「芸術は、生きる技と結びつく」もので、「グローバルな時代のなかで個人の立ち位置

を決めていく」重要な役割があると述べています。

ドイツには、二十世紀初頭に改革教育といって、自身で探求するプロセスを大切にしている教育思想があり、第二次世界大戦後も受け継がれてきました。ウアラッスさんの実践は、それを他の要素も含めながら展開したものと見えるのです。ドイツでは戦後、優れた美術家が現れ、産業の面でも創造的な発展がありました。そこに芸術教育が果たした役割があったのは間違いありません。

しかし少し気になったのは、シンポジウムするとき、「アートプロジェクトの実践で小学校の教員はどうしているのですか？」という質問への答えでした。ウアラッスさんは、「今回は一人で実践しました。残念ながらいっしょにやってくれる先生はいませんでした」とのこと。ドイツでも、画一的な絵を描く授業は少なくなく、ウオーホルやミロなど名画の塗り絵をする授業の問題も話題となりました。とくに近年、そのような傾向が強まっているようです。創造性を養わない国や地域が、将来に渡って社会的活力を維持できるのかどうか、難しい問題があるように思いました。だからでしょう

か、ウアラスさんは、「美術が必要なことを伝える自身の活動を『たたい』」と語っています。

焼け跡の街での展覧会

では、現在の日本で美術はどれだけ必要とされているのでしょうか。学校の教科で比較するならば、主要教科に比べ図工や美術の大切さは広く伝わっていないように感じますし、ドイツの話を聞くと、それもどこかグローバルで今日的な問題とつながっているように思えてきます。

しかし日本でも戦後は、教育現場を含め美術を大事にしようとするさまざまな動きがありました。社会全体に美術を求める熱のようなものがあつたのです。



「テーマ展示 戦後徳島の美術」会場

の例を当館の所蔵作品展「テーマ展示 戦後徳島の美術」（担当…江川佳秀学芸調査課長）で感じ取ることが出来ます。

この展示は、一九四五年の終戦直後から東京で制作した徳島県出身の作家、そして地元徳島で活動を再開した作家たちの作品と資料を紹介しています。

そこには徳島市の焼け跡の写真も展示されていて、時代背景が理解しやすくなっています。死者千名、負傷者二千名を数えた一九四五年七月四日の空襲直後の写真です。眉山中腹から北東方向を写したもので、左上に見える城山の向こうまで、文字通り一面の焼け野原となっています。この空襲で、藩政期以来の建物も近代の洋風建築も木造によるものはことごとく姿を消



谷口董美の作品

したので。

写真から、コンクリート造りのやや大きなビルが残っていたのも分かります。丸新百貨店。ここが終戦の翌年（一九四六年）の十一月に開催された第一回徳島

県美術展覧会（県展）の会場となりました。壁が崩れ落ち戦災の跡も生々しかったといいますが、画家たちが材木で応急の壁をつくり、展示会場としたそうです。日本画、洋画、写真の三部門、計一五六点が出品された会場に、四日間、何と五万人の来場がありました。

観覧者には「軍服姿の若者やモンペ姿の女性」もいたといわれるように、それまで美術に深い関わりがなかった人まで、押し寄せるようにして見学したのです。

今回のテーマ展示は、江川課長の長年の調査研究が活かされたもので、関連資料や年表も充実しています。県展だけでなく、いくつものグループが活発な活動を行っており、市民向けに洋画の普及活動を行った春日橋洋画研究所などの資料も見ることが出来ます。

県西部の作家たちは、池田町（現在の三好市）で四国中央美術展（一九四八―五〇年）を開きました。恩地孝四郎、平塚運一、福沢

一郎といった著名作家の協賛展示だけでなく、大原美術館のコレクションを特別陳列し、児童生徒の作品公募も試みています。関わった作家たちは相当な情熱で取り組んだのでしょう。

「戦後徳島の美術」はコンパクトな展示ではありませんが、終戦から間もない時期、地方においても多くの人が展覧会を見学し、市民への美術の普及や、制作活動を活発に展開していたことを知る機会となっています。

美術のリアリティが増す

「テーマ展示」を見学したお客さまから、次のような感想が寄せられました。「戦時中の空襲で焼け野原になった徳島市内の写真の横に『（唯一焼け残ったビルで）この翌年美術展が開催されました』と書かれていて本当にびっくりしました。辺り一面焼け野原なんですよ。すごすぎる」。この感想は、事実を知ること、観る人の美術に対するリアリティが増すことを教えてくれます。

戦後の数十年間、作家や教員、美術ファンなど多くの方が、裾野を広げるようにして美術を普及してきた流れが、二十一世紀前半の

いま、世代的にも文化史の展開の面でも区切りの時期を迎え、新しい努力を始めなければならぬ時代に入っているようです。そのとき、ウアラスさんの「アートプロジェクト教育実践」が示す、現実とつながりながら、美術以外の分野の人と関係をつくろうとする試みは参考になるように思いました。地域の美術史のなかから学ぶべきものも少なくありません。

世界に視野を広げつつ、足もとの課題に取り組む。地味ではありますが、それも一つの「たたい」といえるのでしょうか。

9月の催し

■特別展「暮らしの感覚―アートと人とデザインが交流する空間」
4日〔日〕まで

・子ども鑑賞クラブ「100回記念・デザインの巻」3日〔土〕14時〜14時45分

■所蔵作品展「受贈記念 泉 茂の絵画」
17日〔土〕から

・展示解説 19日〔月・祝〕14時〜14時45分 講師…吉川神津夫
〔上席学芸員〕

■所蔵作品展「特集1 立つこと、座すこと、歩むこと」

・展示解説 18日〔日〕14時〜14時45分 講師…吉原美恵子〔上席学芸員〕